ISAPH News Letter

アイサップ
ニュースレター

第18号

2014年7月15日発行

写真：マラウイ　太陽の下で仲良くお昼寝

ISAPHはラオスとマラウイの母親と
子どもたちの保健の向上を支援しています

NPO International Support and Partnership for Health

「子どもにやさしい地域保健プロジェクト」進捗報告
～子どもの栄養に関する研修実施について～

ISAPH事務局　齋藤　智子

ヘルスポスト建設などで長年友好関係があるムジンゲ村と、活発な活動が期待されるチボプリラ村の２村で活動が動き出しました。当プロジェクトでは栄養不良児、特に慢性の栄養不良を示す発育阻害児の改善を目的としています。今年の３月上旬に、政府の末端の保健要員であるHealth Surveillance Assistant（HSA）と母親グループリーダーを含む村のボランティア総勢36名を対象に「子どもの栄養に関する研修」を県保健局環境衛生課の職員を講師に実施しました。

研修では５歳未満の子ども、妊婦、授乳婦の栄養、６大食品、成長モニタリングの重要性、子どもの栄養を阻害する寄生虫感染、保健施設への搬送が必要な子どもの病気の症状、手洗いと安全な飲料水など多くを学びました。座学のあとには離乳食の調理実施を行い、メイズ（トウモロコシ）粥に様々な食材を添加した栄養価の高い離乳食を学びました。参加者にはエディンゲニの町のレストラン特製の昼食を提供し、好評でした。

研修期間の５日間は２村のボランティア同士の交流が刺激となり、また、互いの励ましにもなり、活発な研修となりました。今後は健康教育を通じ子どもの栄養に対する認識を高めることに力を注ぎ、自発的に自宅にある食材でより栄養価の高い離乳食作りを実践してもらうよう働きかけていくつもりです。

今回の研修での課題は参加者への日当の支払いでした。マラウイを含む多くの途上国では長年ドナーによる日当支払いの慣習があり、日当が目的の研修という本末転倒の事態になっており、現在マラウイで活動しているドナーの多くがそういった悪しき日当慣習を撲滅しようとしています。JICAもその中の一団体で、

質疑応答

お粥を調理中

当プロジェクトはそういった趣旨に賛同し、基本的に現物支給（交通手段、スナック、飲み物、昼食等の提供）とし、現金の支払いは可能な限り行わないことにしました。政府関係者のみならず、村人も活動における日当の支払いを経験しており、交渉は難航しました。HSAなどは表向きは納得しているようでしたが、重い空気が漂い、何とも言えない圧迫感を感じました。ある村長からは「紙は出ないのか（お金は出ないのか）」というあからさまな質問があり、「出ないのであれば、お米、砂糖、塩などはもらえるか」などという率直な村人の意見もありました。また、ある村の村長は「自分の村で活動している団体がないので、村の発展のためにもぜひ他の村のようにプロジェクトをやってほしい。お金はいらない」という意見が出て、その村の村人は何も発言なしというところもありました。

結局、プロジェクトとしては日当の支払いはしないが、村人に対しては研修で学ぶ手洗いや調理実習の家庭での実践のため、石鹸と塩を配付することにしました。ボランティアはほぼ全員５日間参加しましたが、HSAは昼食を取ると午後は参加せずといった人たちが多々見受けられました。今後彼らのモチベーションをどのように高めていくかプロジェクトとして考えていきたいと思います。

マラウィアンのパワーの源、メイズ

ISAPHマラウイ（インターン）　**西谷　純**

マラウイでは雨季が終わり、乾季がやってきました。3月上旬まで毎日のように降っていた大雨がぴたりと止まり、気持ちの良い快晴が続いています。そして季節の移り変わりとともにマーケットで売られている食材が変わっていくのが目につきます。

雨季が終わると主食であるシマの材料となるメイズ（トウモロコシ）の収穫が始まります。収穫量は天候に左右されますが、今年は豊富な雨と十分な日光のおかげでまずまずの量が収穫できているようです。メイズの製粉所に集まる人や挽いた粉を天日干しする光景をあちこちで見かけます。「シマを食べないとパワーが出ない」「シマのない食事は食事じゃない」とマラウィアンが口をそろえて言うように、陽気なマラウィアンのパワーの源としてメイズは欠かすことのできないもので生活に密接に関わっているということがよくわかります。

さて、3月4日から8日にかけて「子どもにやさしい地域保健プロジェクト」はエディンゲニヘルスセンターで栄養に関する研修を実施しました。2村のボランティアと母親グループ（5歳未満の子どもを持つ母親、約10人で1グループ）のリーダーも研修に参加しました。母乳や離乳食の与え方、衛生面での注意などを熱心に学び、終了後には「もっと学びたい」との声も聞こえてきました。また、研修の後半では家庭にある食材や薪を持ち寄って離乳食の調理実習を実施し、様々な離乳食の食べ比べをして意見交換を行いました。研修後、母親グループのリーダーが研修で学んだ離乳食をグループメンバーに伝えるクッキングデモンストレーションが新たな活動として行われるようになりました。

調理実習で作った料理を発表する母親グループのリーダー

メイズのお粥を食べる子ども

クッキングデモンストレーションでは母親グループのメンバーが集まって調理をします。研修時と同様に食材や薪を持ち寄り、メイズの粉を使ったお粥に大豆や卵、野菜を加えたものを作って子どもたちに食べさせます。おいしそうにお粥を食べている子どもたちの姿はとても微笑ましいものです。普段各家庭で作っているお粥はメイズの粉と水のみであったり、子どもだけのために別途食事を作ることが難しかったりする問題があります。クッキングデモンストレーションでは身近にある食材を使って栄養豊富な食事を子どもたちがとることができるということを目的にしています。

トレーニングの直後はクッキングデモンストレーションを行いたいという熱意がありましたが、最近は計画してもメンバーが集まらず、実施していない状況です。この4月から新たに加わった4名のフィールドスタッフが母親グループを訪問し、アドバイスをしながら村人たちのモチベーションの向上を図る活動をしています。研修やクッキングデモンストレーションを通して学んだことをそれぞれの生活にいかに取り入れていくかが今後の課題であり、母親グループのメンバーが互いに協力しながら無理なく継続していくことが期待されます。マラウィアンのパワーの源であるメイズに家庭にあるさまざまな食材を加えた栄養豊富なお粥を食べて、子どもたちが元気にすくすくと成長していけるよう願っています。

ラオス母子保健プロジェクト２年会議の開催

ISAPHラオス　**田川　薫**

2012年２月にラオス政府と母子保健プロジェクトMOU（了解覚書）３を締結し、２年が経ちました。そこで２月27日にカムアン県セバンファイ郡保健局にて、県保健局、郡保健局、県庁、郡庁職員を招き、２年会議を開催しました。

この会議の目的は、プロジェクトの２年目における活動実績報告と活動に対する意見や現在の問題点等の共有、それに対する解決策を討議し、最終年の活動につなげるためのものです。

これまでの活動実績に対して、会議出席者の方々から多くの感謝の言葉をいただきました。３地区の母子保健状況の改善、特に低栄養・ビタミンB1欠乏による乳幼児死亡の減少、低体重児の減少、妊婦健診率の増加、医療施設での分娩者の増加といった成果に対して高い評価を受けました。しかし一方で、妊婦健診未受診での出産や妊婦健診を受診する時期が遅すぎること、自宅での不衛生で危険な出産、また自宅出産により予防接種を受けることができない、といった課題があります。これらの課題の解決策の一つとして、ヘルスセンター、村の権力者である村長や保健ボランティアとの連携が挙げられました。住民の身近な存在であり、情報共有や住民への普及を促していく存在として、大きな役割を持っているからです。ISAPHの行っている活動でも彼らの協力は欠かせません。最終年の活動では、住民の身近な存在である村長や保健ボランティア等とさらに連携して活動を進めていきたいと思っています。

最後に、この会議を開催するにあたり報告書や発表原稿の作成、当日の会議準備・運営等について、郡保健局職員、県保健局カウンターパートと共に事前に何度も打ち合わせ会議を行いました。会議を開催するためには、多くの段階を踏まなくてはいけません。時には意見が一致せず長時間に亘って議論が行われたこともありました。しかし、ISAPHの活動は県保健局、郡保健局と協力し合っていかなければ成り立たないこと、また、お互いが同じ目標を持ち、それに向かっているということを感じました。

今回の会議を無事に開催することができたのも、郡保健局、県保健局をはじめ、ISAPH関係者の方々のおかげです。心から感謝申し上げます。

会議の様子

スタディツアー

2014年２月13日～20日に、聖マリア病院の「初期臨床研修プログラム　地域保健・医療分野　国際保健コース」の受け入れを致しました。参加された聖マリア病院研修医３名の方の感想文をご紹介致します。

ラオス国際医療研修に参加して

２年次初期研修医　**松浦　充洋**

今回、2014年２月13日～20日の８日間にわたり、ラオスでの国際保健研修に参加させてもらいました。研修内容はラオスでの寄生虫問題についてです。現地に行く前に研修テーマを決めた時は、何から手をつければ良いか分からない状態でした。というのも、日本では寄生虫は稀な症例であり、寄生虫に対してイメージが湧かなかったからからです。しかし、出発前の準備期間でラオスでの寄生虫問題の重大さが見えてきて、現状を把握したい気持ちが大きくなりました。実際に現地に行き、聞き取り調査を行い、自分の目で見て、聞いて、感じることでラオスの現状と寄生虫が未だ広範囲に蔓延していることを実感しました。

では、この蔓延している寄生虫問題をどう解決していくか？「感染源や感染経路を断つ」口で言うことは簡単ですが、具体的にプランを形成し、文章で表現することは難しいものでした。しかし、これを解決してくれる手法がPCM（Project Cycle Management）です。出発前の講義によりAction planを形成する上で、考えを整理、固めることができました。日本とほど遠い環境下でのラオスの文化に触れながら、国際保健活動を学べたこと、保健、予防の重要性を学べたことは私にとって大きな財産となりました。また途上国への支援には色々とありますが、自立できるような支援の必要性とその難しさを痛感しました。

最後になりますが、浦部先生を初め、国際事業部、講義をしていただいた先生方、ISAPHの皆様のおかげで、有意義で充実した８日間となりました。本当にありがとうございました。

聞き取り調査の様子

ラオス研修を終えて

2年次初期研修医　**西岡　慧**

今回私たちは国際保健コースの一環として、開発途上国における公衆衛生的な問題をテーマに、後開発途上国で世界最貧国の１つでもあるラオスについての現状を知りました。具体的にはラオスという国自体について、国が抱える問題点や、現地に出向くことによってラオスの生の実状を習得あるいは体感することができました。また、普段の医療では経験することのできない公衆衛生的な考え方を学ぶことができました。各NPOの団体がどのように問題点を抽出し、どうやってそれを整理し、どういった形でそれを計画に移し行動しているかを学び、実際にその計画を立案する研修までをも経験することができたのは非常に大きな成果だと感じています。

現地での講義や訪問を通じてISAPHの方々の活動も知ることができました。住民の健康増進や保健局との架け橋に尽力されており、実際に現地に出向いた際も非常に活動の効果を感じました。今回は私たちの調査のお手伝いもしていただき円滑に調査を終えることができました。

ISAPHの活動と今回の私たちの調査を通じて感じたことは、啓蒙活動をすれば少なからず効果が表れること、一方で活動をしていない地域とのギャップが生じていること、その背景には郡や県保健局の方々の役割が不十分であるということです。保健局の方々による住民データの把握は非常に曖昧で、上層部に提出するためのみの実際とはギャップのあるデータでした。そのことを彼らはあまり問題としておらず、健康に関する知識はあるにも関わらず、それを住民に浸透させようという意識が垣間見えませんでした。このことが、今後のラオスの社会開発における大きな問題のひとつではないかと感じました。

最後になりましたが、現地ではISAPHのスタッフの皆様に、活動、通訳、食事、観光も含め様々な面でお世話になりました。ありがとうございました。

県保健局にて

ラオスにおけるISAPHの活動視察を通して

2年次初期研修医　**木村　晃久**

私は国際保健に興味があり、2014年2月13日～20日の期間で、ラオスのカムアン県セバンファイ郡カンペータイ地区コクトン村コクトン集落及びソム村でISAPHの活動に参加させていただきました。今回、私はISAPHが行う様々な活動の中からモバイルクリニック活動（予防接種・成長モニタリング・健康教育）に同行させていただきました。

まず日本出国前には、世界保健機関（WHO）が行う拡大予防接種計画（以下EPI）及びラオスの感染症・予防接種状況を文献等で把握しました。EPIは６つの感染症（結核、ポリオ、ジフテリア、破傷風、百日咳、麻疹）に対するワクチン接種を主としており、ラオスでは2000年にポリオ根絶達成が宣言されました。次なる根絶目標として強調されている感染症が麻疹であり、今回はラオスにおける麻疹の流行状況・予防接種状況を調査したい希望を伝えました。

訪れた村はいずれも100世帯程度が暮らす小さな村落であり、上下水道等のインフラ整備はなされておらず、家屋は高床式でした。そこで計28家族に麻疹の既往・予防接種歴等の聞き取り調査を行いました。また、県保健局及び郡保健局を訪ね、麻疹の流行状況・予防接種率等の情報を拝見しました。結果、①半数以上の住民が麻疹症状を認知していないため、多くの麻疹症例は報告されず、行政機関が麻疹症例を正確に把握していないこと、②麻疹予防接種は生後９～23カ月の期間にMMR（新三種混合ワクチン）として一回接種されるが、行政機関は生後11カ月までの予防接種歴のみ集計しており、12～23カ月までの予防接種率を把握していないこと、③末端機関と中央機関の間で情報共有ができておらず、両者のデータが矛盾していることが問題点として挙げられました。これらを解決することでカムアン県の麻疹定期予防接種システムを再構築でき、ひいては麻疹根絶に必要とされる麻疹定期予防接種率90%以上に繋がると考えられました。

今回ラオスでISAPHの活動に参加させていただいたことで、国際保健により興味をもつことができました。最後に浦部先生はじめ、ISAPH職員、訪問を受け入れて下さった病院職員、その他お世話になった関係者の皆様にこの場を借りて感謝申し上げます。

夕暮れのメコン川を背景に

昆虫食による栄養改善のための新たな試み

ISAPH事務局　**磯　東一郎**

皆さんは、昆虫食という言葉を耳にしたことがありますか。最近の日本では昆虫を食べる機会が減っているようですが、戦前は栄養源としてよく食べられていた時期もあり、今でも中部・関東・東北地方を中心として文化、社会的に一定の役割を担っているようです。今回は日本ではなく、ラオス農村部での栄養改善のために現在情報収集している食用昆虫についてご紹介したいと思います。

ラオスの母子保健プロジェクトでは、2008年12月から3年間フェーズ2として実施されたJICA草の根技術協力プロジェクト「生き生き健康村プロジェクト」において、母子の栄養改善を目的としたプロジェクトを実施致しました。活動地域の一部において乳児の死亡が多かったためその原因を調査したところ、ビタミンB1欠乏症による死亡が示唆されました。しかし栄養の問題は乳児ではなく、母親や家族全体の問題でもありました。フェーズ2では、健康教育の推進とお母さんへの個別指導などにより栄養状態の改善に努め、乳児の低体重率は23%から9%に、幼児のそれは58%から41%に低減しました。2012年からのフェーズ3においても健康教育を中心に栄養の改善に努めていますが、乳児においては9%から6%で推移し、幼児は依然30%台から40%の間に高止まり状態です。これが健康教育の限界であると考えています。

そのようなことから、フェーズ3では健康教育だけではなく食料の自給率の向上も模索しています。その中の一つが昆虫の養殖により栄養改善を図る案です。習慣は良しにつけ悪しきつけ生活の中で長年培われた歴史があり、一朝一夕に変えることはできません。特に食習慣は、栄養があるとか体に良いからといって、

コオロギの炒めもの

ISAPH東京事務所での勉強会の様子

いきなり普段食べない食材を導入しても受け入れられないことが多々あります。そこが栄養改善の難しさです。そこで比較的よく食べられているもので、栽培や養殖が可能なものを検討してきました。その一つが食用昆虫です。ラオスの農村部では、コオロギ、イナゴ、タガメ、蟻の卵などが料理され、子どもから大人まで好んで食しています。2013年5月には国連の食糧農業機関（FAO）が昆虫食を推奨する報告書を出し、栄養価が高く、養殖の効率もよい持続可能な食料として昆虫食は世界の注目を集めています。

ISAPHは現在、食用昆虫科学研究会という日本で唯一食用昆虫を研究している学術的な機関にご協力をいただき情報収集を行っています。同研究会は、昆虫食に関する多面的な研究を行い、研究者の育成に努めるとともに、科学的理解を深めるための社会教育の推進を図ることを目的に活動しています。昆虫食の文化からその経済性、栄養、そして美味しさの研究を行い、それらを広く一般に情報発信している団体です。年に1回実施されている科学の祭典「サイエンスアゴラ」に毎年参加し、広く一般を対象に啓発活動を行っており、その実績が認められ2013年12月には優れた団体に贈られるサイエンスアゴラ賞を受賞し、更に191もの出展団体間による投票でも1位に選ばれています。このような研究会にご協力をいただき、今後はラオスにおけるコオロギやイナゴなど食用昆虫の養殖の可能性を探り、栄養改善につなげていきたいと考えています。

帰国のご挨拶

ISAPHラオス　**椋　清美**

2014年３月末日、約３年半にわたるISAPHラオス事務所での任務を終了し帰国いたしました。

2010年８月にラオス国カムアン県で活動中の「母子保健プロジェクト」のアシスタントプロジェクトマネージャーとして赴任しました。以前、私は青年海外協力隊臨床検査技師隊員として首都ビエンチャンの総合病院検査室で２年ほど活動を行ったことがあったため、地方都市での保健医療分野のプロジェクトに従事できることに対しての期待と喜び、そしてこれまでとは違った職種で活動を行うことに不安を抱いてのラオス赴任でした。実際の村での活動は私にとって新鮮であり、また、これまで知り得ることのできなかったラオスの保健医療の問題点などを目の当たりにし、こういった問題を解決するにはどういう活動内容が現地の住民により効果的なのかを日々考えさせられる毎日でした。

帰国前のバーシーの儀式

ラオス母子保健プロジェクトを通じ現場を見て実感できた成果は、現地の人の栄養や衛生の知識レベルを向上させることができたことや、その知識を活かして実際に行動変容をおこすことができるようになったことだと思っています。また、私自身もこのプロジェクトに携わったことによって得たものはとても多く、現地住民と共に成長できた３年半であったと思います。

最後になりますが、ラオス赴任中にご支援・ご助言をいただきました皆様、また、ISAPHへのご支援・ご寄付をいただきました皆様へ心から感謝いたします。ありがとうございました。

平成25年度収支決算報告

項　目	金　額	内　容
前年度繰越金	5,365,003	
収　入	15,227,914	収入合計
収入内訳	769,000	会費など
	317,964	寄付金
	995,000	助成金
	13,097,252	マラウイ JICA 草の根技術協力事業
	48,698	その他
支　出	13,585,699	支出合計
支出内訳	1,870,441	ラオスプロジェクト
	874,811	寄生虫対策活動
	9,707,709	マラウイ JICA 草の根技術協力事業
	481,155	国際協力シンポジウム開催費
	651,583	管理部門、その他
収支差	1,642,215	
25 年度末期預金額	7,007,218	

平成26年度予算

項　目	金　額	内　容
前年度繰越金	7,007,218	
収　入	19,820,000	
収入内訳	1,020,000	会費など
	1,500,000	助成金など
	16,800,000	マラウイ JICA 草の根技術協力事業
	400,000	寄付金など
	100,000	実習費など
支　出	18,050,000	
支出内訳	1,100,000	ラオスプロジェクト（寄生虫対策含む）
	15,400,000	マラウイ JICA 草の根技術協力事業
	500,000	国際協力シンポジウム開催費
	100,000	実習
	200,000	予備費
	750,000	事務局事業費（国内）
収支差	1,770,000	
26 年度末期預金額	8,777,218	

iサイクルより寄付をいただきました

ISAPH 事務局

2014年１月～５月までのペットボトルキャップ収益として、iサイクルより54,043円（キャップ1,080,856個分）の寄付をいただきました。ありがとうございました。

iサイクル　オフィシャル・ホームページ
http://www.st-mary-med.or.jp/icycle/

最近のできごと　2014年1月～5月

1月 6日	ISAPH事務局磯が早稲田大学人間科学部で講義
1月15日~17日	【ラオス】寄生虫プロジェクト聞き取り調査を実施
1月20日	【ラオス】シーブンフアン地区ブンフアナー村において井戸のモニタリングを実施
1月23日	椋プロジェクトマネージャーが東京医科歯科大学保健学部で講義
2月13日	【ラオス】シーブンフアン地区ブンフアナー村においてトイレのモニタリングを実施
2月13日~20日	【ラオス】聖マリア病院初期臨床研修プログラム「地域保健・医療分野国際保健コース」受け入れ
2月27日	【ラオス】プロジェクト2年会議を開催
3月 4日~ 8日	【マラウイ】ボランティア及びエディンゲニヘルスセンター保健要員を対象に栄養研修を実施
3月 9日~18日	【マラウイ】聖マリア病院国際事業部部長ISAPH理事の浦部大策氏をマラウイに派遣
3月24日~28日	【マラウイ】100世帯を対象に栄養調査を実施
3月25日	【ラオス】寄生虫プロジェクト報告会を開催
3月29日	日本ラオス研究会第3回研究大会（東京）に参加
4月 2日~30日	【マラウイ】聖マリア病院国際事業部の山崎裕章氏をマラウイに派遣
4月18日	【マラウイ】味の素株式会社　ガーナ栄養改善プロジェクト関係者の視察受け入れ
5月26日・27日 29日・30日	【ラオス】VHV研修開催
5月27日	【ラオス】青年海外協力隊シニアボランティアがVHV研修を見学
5月27日~29日	【マラウイ】ボランティア及びエディンゲニヘルスセンター保健要員を対象に健康教育研修を実施

ISAPHの役員名簿

役　職	氏　名	備　考
理事長	小早川 隆敏	東京女子医科大学名誉教授
理　事	深見　保正	元福岡県企業管理者
理　事	浦部　大策	聖マリア病院国際事業部
理　事	江藤　秀顕	神山復生病院
監　事	竹之下 義弘	弁護士（東京六本木法律特許事務所）

入会と寄付のお願い

ISAPHの活動を発展させるために、一人でも多くのご入会、ご寄付をお待ちしております。

法人会員　年会費：30,000円

一般会員　年会費：3,000円

入会ご希望の方、ご寄付をお願いできる方は、当東京事務所までご連絡いただければ幸いです。

【振込先】
郵便振込　口座名　特定非営利活動法人ISAPH
口座番号　00180-6-279925

特定非営利活動法人ISAPH　東京事務所
〒105-0004
東京都港区新橋3-5-2　新橋OWKビル3階
TEL.03-3593-0188　FAX.03-3593-0165
E-mail　tokyojimusho@isaph.jp
URL　http://isaph.jp/

東京事務所案内図

【ISAPHニュースレター　第18号　編集スタッフ】
石原 潤子／磯 東一郎

社会医療法人
雪の聖母会

聖マリア病院

理事長：井手義雄　病院長：島 弘志
〒830-8543　福岡県久留米市津福本町422
TEL.0942-35-3322㈹　FAX.0942-34-3115
URL　http://www.st-mary-med.or.jp

- 厚生労働省臨床研修指定病院
- 厚生労働省歯科臨床研修施設
- 厚生労働省臨床修練病院
- 地域医療支援病院
- 福岡県救命救急センター
- 福岡県総合周産期母子医療センター
- 福岡県救急告示病院
- 福岡県地域災害拠点病院
- 福岡県エイズ治療拠点病院
- 福岡県肝疾患専門医療機関
- 福岡県災害派遣医療チーム指定医療機関
- 福岡県第二種感染症指定医療機関
- 地域がん診療連携拠点病院
- 福岡県小児救急医療電話相談施設
- 福岡県児童虐待防止拠点病院
- 久留米広域小児救急医療支援施設
- A Baby-Friendly-Hospital-Initiative（赤ちゃんにやさしい病院）WHO・ユニセフ指定
- 自動車事故対策機構NASVA療護施設
- ISO 9001認証施設
- ISO 15189認定施設
- 日本医療機能評価機構認定施設（一般病院Ver.6.0）
- 日韓医療技術協力指定病院
- 久留米市病（後）児保育施設

※本ニュースレターの発行は、社会医療法人雪の聖母会聖マリア病院にご協力をいただいています。